

8年間の地域支援プロジェクトの

第3章 特色ある取り組み

1. 専門職における臨床実践教育プログラムの開発

(1) アクティブ・ラーニングのツール開発 (MICT)

① MICT とは

MICT (Mobile Information and Communication Technologies: 携帯情報伝達技術) は、インターネット回線を使用した携帯情報伝達技術です。ネットワーク配信システムにより、物理的距離という制約を乗り越え、情報の即時的共有を行いながら、フェイス・トゥ・フェイスの意見交換、およびディスカッションが可能となります。

大学側では、鹿児島大学総合教育研究棟7階スーパービジョンルーム3に大型液晶テレビ(50インチ)とネットワークコンピューターを固定設置しています。地域側には、携帯できるノートパソコン、マイク、ビデオカメラならびに望遠レンズを準備して、随時、使用時に持参できる環境としております。ネットワークでの個人情報の取り扱いには、配慮が必要です。一般回線の使用に当たっては、専門機関に依頼して独自の暗号化システムを設け、情報の機密性を保持しました。

② MICT の活用例

2012年度は、MICTを活用して実際の事例を通して地域と大学をつないだ同時進行的な事例検討会を実施しました。2012年のMICT活用による学習効果は、①ビデオ学習・作業学習・事例検討を伴った“可視化された事前学習”，②協働学習の有用性を実感できる“共同参加型チュートリアル学習”，③地域支援者との“参加型学習”によるリアリティの向上でした。

2013年度は、2012年のMICT活用で明らかとなった学習効果に注目し、学内実習(心理臨床相談室)とのコラボレーションを試み、今後の発展の可能性を検討いたしました。具体的には、プロジェクトリーダーの土岐が院生と担当するケースにおいて発達検査(新版K式発達検査)の実施場面をMICTを活用してスーパービジョンルーム3に同時中継し、新版K式発達検査実施予定の院生(3名)がビデオ学習を行うものでした。この取り組みでは、3名の院生がそれぞれ発達検査を実施する機会を持ち、交互にビデオ学習を行いました。参加した院生たちからは、新版K式検査実施の事前学習、実施・ビデオ学習、事後学習を通じて実施方法だけでなく、実務の自信が得られる“リアルな学び”であったようです。

2014年度は、新版K式発達検査、田中ビネー知能検査V、WISC IVなどのビデオクリップを作成し、院生の学習機会を増やすため、オンデマンド視聴覚学習教材として活用を開始しました。

(2) 外部専門家による匿名評価による学習システム

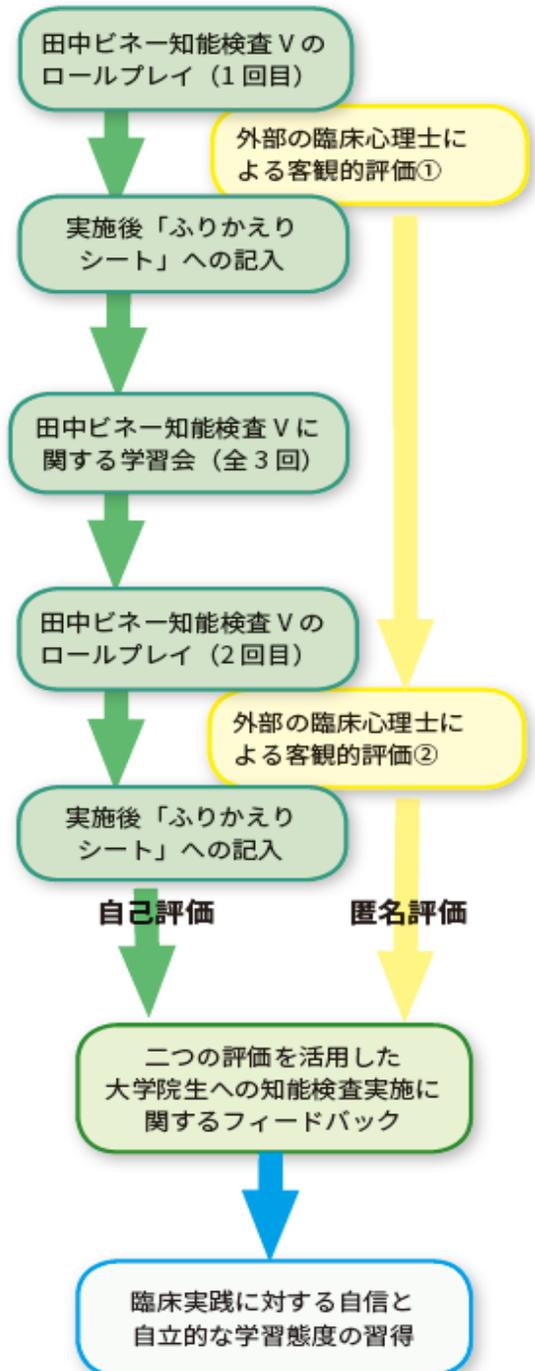
地域支援で実際に大学院生が心理検査を行うという高い目標をクリアするために、検査の正確な実施方法を習得するとともに、実施に対する自信を深められるような知能検査の学習システムを構築する必要があります。2014年度は、伊佐市での地域支援に出かける学生に対して、田中ビネー知能検査Ⅴの学習会を行いました。自己評価が客観的な評価に近づくよう、大学院生のロールプレイ場면을ビデオに収め、外部の臨床心理士に評定やコメントを依頼し、匿名でのフィードバックを行いました。

具体的な内容として、大学院生は田中ビネー知能検査Ⅴの検査者としてのロールプレイを実施し、録画するとともに「ふりかえりシート」により検査実施に関する自己評価を行いました。一方、録画した映像は、第一線の現場で働く3名の臨床心理士より、臨床的な視点からのチェックを受け、客観的な評価のみならず、大学院生の長所も含めたスキルアップのための具体的な提案をフィードバックしました。

結果、大学院生の多くは、自分の検査実施や子どもへの対応に関して、低く評価しがちであることが明らかとなりました。そのため、大学院生が自分自身の実施や対応を肯定的に捉えて、指摘や指導を安心して受け入れられる教育プログラムの重要性を再認識することとなりました。

また、大学院生にとって、匿名の外部専門家の評価やコメントは、実践的で学びになると受け止められ、自分の検査スキル、子どもへの対応に関する学習意欲の向上、自信の向上へつながったようです。

匿名評価を導入した学習システム



第3章

(3) ビデオ教材を活用した心理検査のオンデマンド学習

地域支援プロジェクトでは、心理検査のビデオ教材を作成し、オンデマンドで活用できるセルフ・ラーニング型教育を進めてきました。先述した MICT と連動して、大学院生が行った検査場面は、学習利用を目的として録画され、モザイク化やテロップ入れなどの編集作業を行い、20～30分程度のDVDへまとめました。今では、検査実施が決まった大学院生は、自分が検査を行うための事前学習としてDVDを大いに活用しています。複数の学生が視聴し、その後、ロールプレイ学習を行うという光景も増えてきました。

プライバシー保護や守秘義務と関連するため、対象者の同意は欠かせません。目的を丁寧に伝え、快く協力してくださるクライアントさんも多かったです。手間も時間もかかる作業でしたが、大学院生自身のセルフ・ラーニングを促進すべく、コンテンツ・メニューの更なる充実を目指していきます。

今までに作成した心理検査のビデオ教材

検査名	生活年齢	性別
新版 K 式発達検査	4 歳	男
新版 K 式発達検査	4 歳	女
新版 K 式発達検査	3 歳	男
新版 K 式発達検査	5 歳	女
新版 K 式発達検査	4 歳	女
田中ビネー知能検査 V	5 歳	男
田中ビネー知能検査 V	5 歳	女
田中ビネー知能検査 V	8 歳	女
KABC- II 認知尺度	7 歳	男
KABC- II 習得尺度	7 歳	男
WISC- IV	10 歳	女

2. 地域支援プロジェクトに関する研究発表

(1) 日本心理臨床学会

演 題	大会名 筆頭発表者・年度
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (1) - デリバリー方式による臨床心理学的地域支援活動 -	日本心理臨床学会第30回秋季大会, 上原美穂, 2011
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (2) - 新規地域との連携をめぐる実践とその留意点 -	日本心理臨床学会第30回秋季大会, 中原睦美, 2011
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (3) - 大学院生に対する臨床心理学的地域支援に関する意識調査の結果から -	日本心理臨床学会第31回秋季大会, 上原美穂, 2012
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (4) - MICT を活用した大学院生の実践参加とその効果 -	日本心理臨床学会第32回秋季大会, 土岐篤史, 2013
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (5) - 自律的学習の促進を目指した実践型教育 -	日本心理臨床学会第33回秋季大会, 土岐篤史, 2014
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (6) - 大学院生の非職業的感覚を活用した臨床心理学的地域支援の実践と教育の取組み -	日本心理臨床学会第33回秋季大会, 服巻豊, 2014
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (7) - MICT の心理検査実習への教育的応用 -	日本心理臨床学会第33回秋季大会, 小澤永治, 2014
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (8) - 小規模中学校における大学院生参加型コミュニケーション・プログラムの実践 1 -	日本心理臨床学会第33回秋季大会, 松浦隆信, 2014
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (9) - 小規模中学校における大学院生参加型コミュニケーション・プログラムの実践 -	日本心理臨床学会第33回秋季大会, 金坂弥起, 2014

第3章

演題	大会名
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (10) - 田中ビネー知能検査 V に関する学習サイクル構築の試み -	日本心理臨床学会第 34 回秋季大会, 平田祐太郎, 2015
地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発 (11) - 高齢者へのライフヒストリーワーク実践 -	日本心理臨床学会第 35 回秋季大会, 稲谷ふみ枝, 2016

日本心理臨床学会第 33 回秋季大会で掲示したポスターの一部

地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (5)

— 自律的学習の促進を目指した実践型教育 —
土岐寛史・川口智美・服巻豊・小澤永治・安部恒久・金坂弥起・中原睦美・松浦隆信・山中寛・松木案 (鹿児島大学)

I. 目的

地域への専門的貢献
実践的大学院教育

教員の地域テリパリー方式の支援活動に学生が同行し、即戦力として地域実践活動が行える人材養成を目指した、新たな実践型教育プログラムの開発を行う。

本発表では、自律的学習の促進を目指した実践型教育の試みについて報告し、その教育的意義と効果について検討する。

III. 結果

自律的学習に関する自己評価チェック

項目	講演会	検査作成	相談会
関心	3.8	3.7	3.7
技術	3.2	3.5	3.7
充実	3.3	3.5	3.2
自信	1.3	1.3	1.7

■「関心」は3.8、3.7、3.7であり、全実習において非常に高い数値を示した。
■「技術」は3.2、3.5、3.7であり、活動の経過に連れて数値が向上していった。
■「充実」は3.3、3.5、3.2であり、全体的に高値であり、【検査作成】において最高値を示した。
■「自信」は1.3、1.3、1.7であり、全体的に低値であったが、最後の【相談会】で数値は向上した。
■支援活動を実践場所と参加様式で分類すると、【講演会】は地域実践・能動的参加【検査作成】は学内実践・能動的参加【相談会】は地域実践・能動的参加と考えられる。
■本実習では「関心」「技術」「充実」は高値を示したのに対して、「自信」は低値に留まった。

II. 方法

対象：臨床心理学を専攻する大学院生6名。
活動概要：適切な就学相談会を実施したいとの自治体からの要請を受け、対象院生は該当自治体に所属する既卒生（臨床心理士）の協力を得て、計画段階から地域支援に参加を行う。
提案概要：以下の4つのパートから構成される。

①事前調査 ②事前学習 ③支援活動 ④事後学習

①事前調査：就学支援の現状や就学判定のあり方に関する現行調査・先進地調査
②事前学習：支援メニュー作成（啓発講演会、就学前簡易発達検査作成、就学相談会）田中ビネー式知能検査 V のチーム学習 就学前簡易発達検査の作成と改訂
③支援活動：支援活動の実施
④事後学習：振り返りと自己評価

支援メニュー
活動1：啓発講演会【講演会】
活動2：就学前簡易発達検査作成【検査作成】
活動3：就学相談会【相談会】

各支援活動について、自律的学習を促進する要素と思われる「関心」「技術」「充実」「自信」の4項目で構成された自己評価チェックについて5件法で回答してもらい、その結果と自由記述について検討を行った。

IV. 考察

本活動は自律的学習を促進する。しかし、「自信」の向上に関しては課題がある。

学生の自由記述において、「支援活動の責任と困難の実感」「既卒生や地域の方々に支えられ支援活動を全うできた喜び」「実践学習の大切さを実感」

→
 実体験によるリアリティ向上により、かえって「自信」が低下するのかもしれない。
 また、「自信」は地域実践・能動的参加において育まれる可能性があり、今後の検討を要する。

地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 (6)

— 大学院生の非職業的感覚を活用した臨床心理学的地域支援の実践と教育の取組み —
服巻豊・川口智美・土岐寛史・小澤永治・安部恒久・金坂弥起・中原睦美・松浦隆信・山中寛・松木案 (鹿児島大学)

I. 目的

1. 「地域支援プロジェクト」とは

地域への専門的貢献
実践的大学院教育

教員の地域テリパリー方式の支援活動に学生が同行し、即戦力として地域実践活動が行える人材養成を目指した、新たな実践型教育プログラムの開発を行う。

2. 目的
臨床心理学を専攻する大学院生の本来持っている「非職業的感覚」を活かした学生参加型の臨床心理学的地域実践活動において以下2点の検討を行う。
(1) 実践活動の企画・立案
(2) 活動実践の実践効果

II. 方法

1. 対象 臨床心理学を専攻する大学院生10名、A市母子保健事業に関わる保健師24名
2. 手続き A市保健師より乳幼児健康診査（以下健診）時の保護者とのコミュニケーションにかかわる研修の要望を受け、地域支援活動を行った。
(1) 事前学習と企画・立案 事前学習として、大学院授業における「発達障害者心理臨床」の内5回の授業内で健診の意義と保健師の役割を概説した。授業内で学生に対して「健診」や「健診に来る母親」にどのようなイメージを持っているかを尋ね、得られた語りの記録をカテゴリ化した。また、得られたカテゴリを用い、保健師への研修内容を企画・立案した。
(2) 実践効果の検証 教員の講義に学生をファシリテーターとした保健師グループディスカッションを行った後、学生と保健師を対象に満足度（5件法）と自由記述による感想を求めた。

(1) 情報不足「ママ」
何をされるかわからない、行くの嫌。
(2) 内向的な不安な「ママ」
→ 専門家の人にならな「暖かいこと」を言われたら嫌だな
(3) 仕事優先「ママ」
→ 気にならなことがなかつたら行くのは面倒くさいかな。
(4) 子どもに自信がある「ママ」
→ 一回しか見てないのに、何がわかるのか？
→ 今日はずきが悪いだけ
(5) 健診をポジティブにみている「ママ」
→ 自分の子どもの成長が確認できるからワクワクする

3. 研修会内容のスケジュールの立案
ここまでの結果を基に下記スケジュールを立案した。

1. 健診と親子教室のつながりと健診の重要性
2. 健診に来た母親の気持ち【健診イメージと母親像】
3. 保健師と院生の小グループディスカッション（健診イメージと母親像を題材に振り返って）
4. 小グループディスカッション
(1) 保健師のこれまでの工夫
(2) 保健師が安心して発達の悩みを伝えるには？

III. 結果と考察①：支援活動の企画・立案

1. 学生の非職業的感覚に基づく健診へのイメージ
事前学習の中で、学生がもつ健診へのイメージをカテゴリ化したところ、下の2群が抽出された。

(1) 検査して調べ場所
→ 指差し・道標・積み木をさせたり、体重・身長をはかる「私たちが受けてきた、登列して、次から次へ回される健診診断と同じイメージ」
(2) 発達・育児の評価を受ける場所
→ 「子どもの成長を専門家の立場で見てもらえる。子どもの発達が知れる楽しみな場所」

2. 学生の非職業的感覚に基づく健診を受ける母親像
事前学習の中で、学生がもつ健診を受ける母親像をカテゴリ化したところ、以下の5群が抽出された。

IV. 結果と考察②：支援活動の実践効果

1. 研修会に対する満足度

学生の満足度

大変満足	30%
満足	70%

保健師の満足度

大変満足	74%
満足	12%
まあ満足	9%
まあ不満足	1%
不満足	0%

2. 学生の自由記述結果

(1) 臨床現場感覚と保健師の専門性への理解と気づき
→ 初めはお母さんに対して笑顔で接する。課題がけない子どもに対して「まあとしてみようか」と声をかけるなど、慌たしい中で一人一人丁寧にフォローしていることをあらためて知った。
(2) 心理専門職としての専門性への自覚
→ 母親に大事なことを伝える面では「伝え方」の部分で心理士が入ってほしいことに意義がある。機軸としての役割を心理士は担っていく必要がある。

V. 総合考察

学生は、保健師の専門性に触れ、心理士としてのプロ意識が芽生えた。保健師は非職業的感覚に陥る非職業的感覚に立ち戻ることの重要性を再認識した。非職業的感覚を用いた保健師研修は、学生にも保健師にもそれぞれの専門性を意識化する意義が明らかとなった。

日本心理臨床学会第34回秋季大会で 掲したポスター

日本心理臨床学会第35回秋季大会で 掲した時の様子

**地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した
新たな「実践型教育プログラム」の開発 (10)**
— 田中ピネー-知能検査Vに関する学習サイクル構築の試み—
平田祐太郎・小澤永治・土岐篤史・服巻豊・安部恒久
金板弥起・中原睦美・松浦隆信・山中寛・松木繁

I. 目的

地域への専門的貢献
実践的
大学院教育

教員と学生によるデリバー方式の地域支援活動を基盤とした実践型教育を発展的に継続 (土岐ら, 2011; 服巻ら, 2014)

自治体主催の就学相談会での支援活動
知能検査に関する学習会の実施

- 大学院生は臨床実践に対して自律的な学習態度を身につけることが求められる。
- しかし、自律的な学習態度の基盤となる適切な自己評価の視点をもつことに困難がみられる。

本研究の目的
知能検査実践に焦点を当て、自己評価と他者評価の関連を検討することで、大学院生の自律的学習に繋がる実践教育に関する知見を得る。

II. 方法

対象 ①知能検査学習者：臨床心理学を専攻する大学院生10名。
②外部評定者：臨床現場で知能検査の実施経験を多く有する臨床心理士3名。

手続 ①田中ピネー-知能検査Vのロールプレイと自己評価
4級級の課題について、検査場面の個別ロールプレイを実施した。終了後、筆者らが作成した質問紙を用いて検査実施に関する大学院生の自己評定を求めた。また②・③の後、再度個別ロールプレイを行い、大学院生の自己評定を求めた。
②田中ピネー-知能検査Vの学習会
③回の学習会を実施した。

#1 理論と概要	・背景理論の確認、留意事項の確認
#2 実施方法①	・マニュアル、検査用紙、用具の確認 ・3〜4級級の課題実施方法、ロールプレイ
#3 実施方法②	・通過/不通過の判定基準の確認 ・5〜6級級の課題実施方法、ロールプレイ ・通過/不通過の判定基準の確認

③就学相談会における検査実践
対象者のうち名は、②の学習会後、自治体主催の就学相談会において対象児童に対して実際に知能検査を実施した。
④ロールプレイ場面の他者評価
個別のロールプレイの録画映像に対して、外部評定者3名による評定を求めた。

調査項目
①自己評価項目：SELF-CPP (良原ら, 2010) および発達検査実施の自己評価項目 (小澤ら, 2015) をもとに調査項目を作成した。20項目に10件法で回答を求めた。
②他者評価項目：自己評価と同様の項目から、評定者用の一部を削除した14項目、2箇のロールプレイ場面の録画映像に対し、外部評定者から10件法で回答を求め、併せて自由記述でロールプレイ場面へのコメントを求めた。

III. 結果

1. 自己評価・他者評価得点：それぞれ平均値を算出

Figure 1. 検査ロールプレイに対する自己評価・他者評定の平均値

2. 検査学習者の感想

- 再指示や間違えた時とどのように対応するか難しかった。
- 2回目は検査に慣れ落ち着いて取り組むことができた。
- 検査実施に精一杯で行動観察をする余裕がなかった。

3. 外部評定者からのコメント

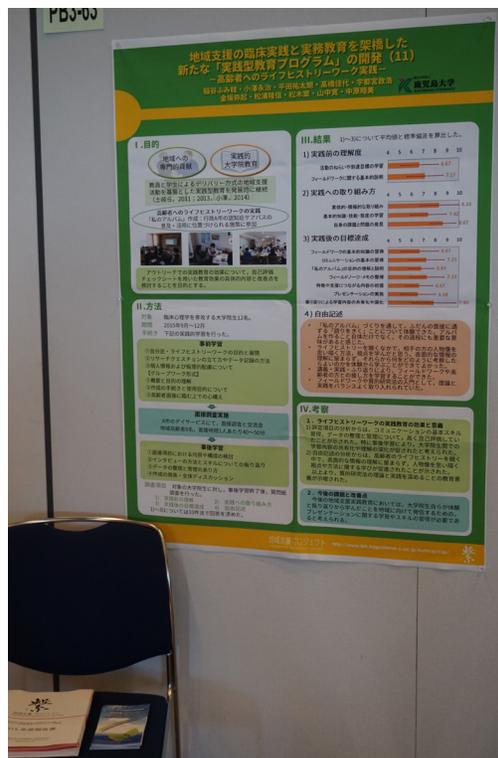
- 検査から検査の移行がスムーズだった。
- 子どもの目を見て語りかけることが増えていた。
- 行動観察に関する記述がもう少し充実するとよい。

4. 考察

- 全体として自己評価は他者評価より低いが、1回目から2回目への得点の上昇傾向は多くの項目で一致していた。
- 課題実施に関する「4」「5」「6」の項目では、1回目から他者評価は高い一方、自己評価は低くズレが大きかった。
- 単発ではなく複数回の実習教育を行うことで、指導者との間で、具体的に改善された点や習熟した点について共有することができる。
- マニュアルに沿った指示や操作など、学習者ができている点を積極的にフィードバックすることで、学習者の自信や自律的学習への意欲向上につながる可能性がある。

今後の課題：教育内容の詳細、フィードバック方法の検討

地域支援プロジェクト http://www.jeh.kagoshima-u.ac.jp/kumcp/csp/



地域支援プロジェクトの紹介も併せて行いました

(2) 鹿児島大学心理臨床相談室紀要

2015年には、映像教材を用いた発達検査学習の実践について、大学院生への調査から教育効果の検証を行い、臨床心理士養成における実践教育のあり方について検討しました。その結果を、鹿児島大学心理臨床学相談室紀要に投稿し、掲載されました。

小澤永治・平田祐太郎・土岐篤史・服巻豊 (2015) 地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発 - 映像教材を用いた発達検査に関する実践型教育の開発 - 鹿児島大学心理臨床相談室紀要 11,3-12

第3章

(3) その他の学会・大会等

2016年8月、カナダ・カルガリーで開催された第21回子ども虐待防止世界会議（The 21st ISPCAN International Congress on Child Abuse and Neglect）にて研究成果の発表を行いました。「Group care size and difficulties of children with developmental disorders in Japanese residential care homes」との演題で、小澤・平田がポスター発表を行いました。学会発表当日は世界各国の地域における子どもの虐待や支援に関心のある多くの参加者を集め、活発な意見交換がなされました。

8年間を通して、多くの方と意見交換をすることができました。ありがとうございました。



日本心理臨床学会でのポスター発表

3. 地域支援プロジェクトを活用した国際交流

(1) 中央ヨーロッパの視察

2017年3月に、臨床心理学研究科専任教員の宇都宮が、鹿児島純心女子大学大学院の久留一郎教授をコーディネーターとする海外視察旅行に同行し、ポーランドとオーストリアの犯罪被害者支援団体や司法関係機関を視察しました。

① 犯罪被害者支援団体

ポーランド被害者支援協会 SUBVENIA VICTIMA と、オーストリアの白い環 Weisser ring in austria を視察しました。いずれの国においても、犯罪被害者が支援を要する存在であるということが社会全体においてきちんと認識され、公共政策や社会保障制度の一環として支援活動が行われていること、官民協働による活動形態が定着していることなど、わが国における犯罪被害者支援制度や同活動を考える上で、とても参考になりました。犯罪被害者が裁判所等の官庁とかかわる際の介添えや法廷への出廷の付添い、被害者が経済的に困難な状態に陥っている場合の援助等、具体的な支援活動についても活発な意見交換がなされました。



ポーランド被害者支援協会
SUBVENIA VICTIMA



白い環
Weisser ring in austria

第3章

②関係司法機関

ウィーン地方裁判所とニュースタート NEUSTART という民間支援団体を視察しました。オーストリアでは市民が裁判官とともに合議体を構成し、犯罪事実の認定や量刑のほか、法律問題についても判断を行い裁判に関与する参審制度がとられており、その詳細を地方裁判所ではうかがうことができました。また、ニュースタートは、犯罪被害者だけではなく、その家族や犯罪加害者の支援も行っている民間組織であり、日本でも注目されている修復的司法 Restorative Justice の実践事例について触れることができました。

③その他

視察旅行の初日にはアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所を、最終日にはロゴセラピーで有名なフランクル (Frankl, V.E.) の博物館を視察しました。人類最大の過ちとされるホロコートの悲劇と惨状、そしてそこから奇跡的に生還したフランクルの思想と哲学からは、とても一言では語りきれないほど多くの学びと体験がありました。



ウィーン地方裁判所



ニュースタート (NEUSTART)

(2) これまでの国際交流実績

地域支援プロジェクトでは、8年間の活動において以下のような国際交流を行ってきました。このような活動を通し、国内に留まらず国際的な視点から地域支援について情報収集し、地域支援活動に活かしてきました。

期間	訪問先・招待者・活動内容等	担当教員
平成23年3月8日～14日	スウェーデン KIND(Center of Neurodevelopmental Disorders at Karolinska Institute), BUP(Barn-och ungdomspsykiatri/neuropsykiatri)等を訪問	土岐・服巻
平成24年9月23日～27日	スウェーデン KIND(Center of Neurodevelopmental Disorders at Karolinska Institute), BUP(Barn-och ungdomspsykiatri/neuropsykiatri)等を訪問	土岐
平成26年3月15日～20日	スウェーデン KIND(Center of Neurodevelopmental Disorders at Karolinska Institute), BUP(Barn-och ungdomspsykiatri/neuropsykiatri)等を訪問	土岐・小澤
平成27年7月6日	スウェーデン ウプサラ大学大学院神学研究科 河内優郁子先生をご招待し、講演会を実施	稲谷
平成28年2月18日～22日	ウプサラ大学大学院を訪問し、研究交流を実施	稲谷・小澤
平成27年10月7日	Vicki de Klerk-Rubin 先生をご招待し、バリデーショナルワークショップを実施	稲谷
平成28年4月4日	Southwest Autism Reserch&Resource Center 稲田尚子先生をご招待し、ADOS-2 入門研修を実施	高橋
平成28年7月1日	マレーシア国立大学 Gan Chun Hong 先生をご招待し、講演会を実施	高橋
平成28年11月1日	American Hospital of Paris ダブー・福先生をご招待し、バリデーショナルに関するワークショップを実施	稲谷
平成29年3月18～26日	中央ヨーロッパ 犯罪被害者支援団体等を視察	宇都宮

第3章

期間	訪問先・招待者・活動内容等	担当教員
平成29年10月27日	パリ第5大学心理学部神経心理学科エイジングチーム 講師 Pauline Narme 先生をご招待し、講演会を実施	稲谷
平成29年11月9日	オーストラリア・タスマニア大学講師 John Mercer 先生をご招待し、講演会を実施	松浦
平成30年3月1日～6日	フィリピン フィリピン大学、障害児施設等を視察	高橋・中村



KIND 訪問



バリデーション・ワークショップ



講演会